

序

循環器疾患の診断において心臓カテーテル検査は非常に重要である。そのなかでも患者数の増加が著しい冠動脈疾患では、心臓カテーテル検査は診断だけでなくPCIという治療法と表裏一体の関係にある。将来PCIの修得を希望する若手医師が多い現在、その基本である心臓カテーテル修得に対するニーズは大きい。しかし、心臓カテーテルでは重大な合併症が起こりうるため、基本手技・血管造影所見の読影力を確実に身につけることが重要である。

小生が研修医時代に循環器内科医を志し、ようやくチームの一員として心臓カテーテル検査に加えてもらった頃の思い出を述べる。冠動脈造影の所見を全く読むことができず、カンファレンスで先輩の医師が「前下行枝の7番に90%狭窄」などと瞬時に反応する言葉が神業のように感じた。毎夜、シネフィルム10本をじっくり見ることを日課として続けるうちに少しずつ読めるようになった。当初は、「自分には冠動脈造影という画像情報を理解する能力が欠如しているのだ」と絶望的な気持ちであった。そのときに心臓カテーテル検査や冠動脈造影についての初学者向けの、理解しやすく実践的な書物を探したが無かった。

そこでこの度、心臓カテーテルを初めて学ぶ医師のための手技マニュアルとして本書を企画した。すべての解説に写真やイラストをつけると同時に、基本手技・造影所見の読影についてのコツを随所に盛り込むことで、理解しやすい入門書を目指した。特に冠動脈造影像の読影力アップのため、造影所見には詳細なシェーマを添えた。初学者がつまづきやすい内容を集めたトラブルシューティングを掲載し、既刊本と比べ、より臨床で役立つ実践的な内容を意図した。

本書の企画を理解し、原稿を執筆してくれた先生方に感謝する。執筆陣は現場で多数の検査を実施している方々に依頼した。これが本書の内容に臨場感を加えているものと思う。また、本書の企画から発刊までを応援してくれた羊土社編集部の鈴木美奈子 女史、深川正悟 氏、佐々木幸司 氏に感謝する。

2009年 5月

中川義久